

共に生きるとういこと

「人は一人では生きていけない」

私は、この言葉が大嫌いでした。母や先生方がこの言葉を使うたびに、「嘘だ。一人でだって生きていける。誰かに支えてもらわなければ生きていけないなんて、弱い人間の言うことだ。」と、かたくなに拒んできました。

そんなある日、私の住む都市には、新燃岳の噴火により、大量の火山灰が降り注ぎました。周りは一面灰色の世界。私の通学路は、灰で覆い尽くされました。その異常な光景に、私は言いようのない不安でいっぱいになりました。まるで、街中の時間が止まり、世界で私一人だけが取り残されたような感じがしました。

毎日のようにその嵩を増す火山灰。そんな生活にようやく慣れたころ、私は通学路で一人のおじさんと出会いました。そのおじさんは、道路に積もった火山灰を、自動車の通る道路の中心から、道路脇へと移動させていました。何度も何度も腰を曲げ、小さなちりとりをいっぱいにしてせせと運んでいるのです。

自分の土地でもない一般の公道を、本当に熱心に掃除をするおじさん。何のために、誰のためにやっているのか分からないまま、私はただぼんやりと眺めながら、その場を通り過ぎました。





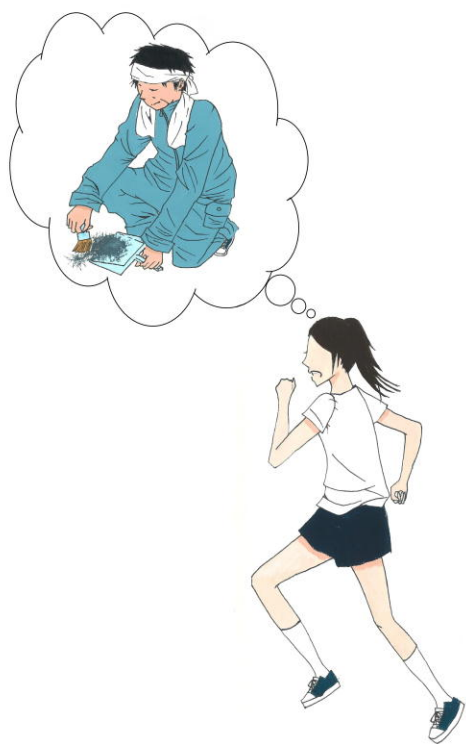
二か月近くがたち、ようやく噴火が収まってきたころ、私たちの学校では、部活動生を中心に、グラウンドの火山灰除去作業がありました。私が所属する陸上部は、体育館周辺の担当でした。そこは火山灰集積場所から最も遠く、何度も何度も火山灰でいっぱいになったバケツを両手に提げ、汗だくになって往復しました。水を吸った火山灰はずっしりと重く、歩くたびに体が左右に振られ、いつの間にか私の手は真っ赤になっていました。けれども、不思議と苦になりません。そればかりか、何ともいえない誇らしげな気持ちでいっぱいになりました。

その日の部活動では、久しぶりに茶色の地面を踏みしめ、みんな練習しました。思いつき走り走れる喜びをかみしめていたその時、私の脳裏に、ふとあの道路をきれいに掃除していたおじさんの姿が思い浮かんだのです。

あの日、熱心に働いていたおじさん。あの時のおじさんも、きっと今の私と同じ気持ちではなかったのでしょうか。今日私がかんばったことを知っている人なんて、ほんのわずかもありません。でも、人のために一つのことをやり遂げた私は、とても満足でした。

具体的に誰のためということではなく、ただみんなが過ごしやすいようにと、一生懸命に道路を掃除していたあのおじさんも、きっと満足していたのだらうと思います。

そして、私はこうも考えました。実は、私が気付かないだけで、身の回りには、こんなふうには、知らない人たちの善意があふれているのではないかと。



今まで、私は「人は一人では生きていけない」という言葉に、人間は助け合わなければならない弱い生き物なのだ、という印象をもっていました。だから、私一人だけでも生きていけると、反発していたのです。

しかし、この出来事をきっかけに、人は、お互い^{たが}が無意識のうちに支え合っているものなのだ、と素直^{すなお}に思えるようになりました。「助け合う」「支え合う」ということは、今まで私が考えていたようなことではない、と気付いたのです。

新燃岳の噴火は、私たちに大きな被害をもたらしました。でも、それ以上に、大事なことを私に教えてくれました。

「人は一人では生きていけない」

これが、今一番私が大好きな言葉です。